



ブリュールゲルの「子供の遊戯」 11

森 洋子

73 小猫ちゃん、小猫ちゃん、王様の椅子または

王様の椅子(註¹) Katje, katje, Koningssteeltje
of De onthroonde Koning (図一)

この遊戯について、ド・マイヤーと他の研究者は全く別の内容を考えているので、まず前者の主張する「王様の椅子ごっこ」から説明しよう。ド・マイヤーによると、この遊戯のルールは、まず、くじか数え歌できめられた子供が王様の椅子に坐る。その側で王様が助人(こ

の絵の場合は女の子)と一本の紐を互いに持ち合う。他の子供たちはその王様の椅子をねらって襲いかかるが、その時、助人は王様を守るために彼らを追い払わねばならぬ。

それに対して、ヒルズやハルトマン・レンスは、「鎖につながれた悪魔」とか「熊払い」と名づける。^{註²}だがゲームのしかたはほぼ同じく、椅子に坐った男の子を悪魔にしたて、他の子供たちは彼をからかい、打とうとする。それに対して悪魔は自分で防護することは許されず、彼



図1 ブリュエゲル「小猫ちゃん、小猫ちゃん、
王様の椅子または王様の退位ごっこ」
（「子供の遊戯」の部分㊸）

と紐を共有する助人が邪魔者たちすなわち苦しめる霊を追払わねばならない。助人がその霊のひとり捕えるのと、悪魔は自由の身となり、苦しめる霊は新しい助人、もとの助人は悪魔という風に順送りに役を交代する。

十六世紀のネーデルラントの人文主義者ハドリアヌス・ユニウス（一五一一—一五七五）は『八つの言語による正しい名称を含むすべての事物の目録』（一五七六年）

の中で、この遊戯がギリシャで「ヒトリンダ」（揶揄するの意）として知られるものとし、遊びのルールをこう説明している。「真中に坐っている間、その周囲の者たちへのしられ、突つかれ、殴られる。それは誰かが捕まり、彼の代わりにそれを受けるまで注3続く。」

一六二六年、アムステルダムでJ・A・カロム社から出版された匿名作者の『子供の書、子供の遊戯の寓意』には、この遊びについて、ひじょうに詳細に歌われている。

「男の子が一体何をやり始め、

何を楽しむと考えているかをみよ。

彼らは互いに若々しく、

共通の約束をする。

ひとりは真中に立ち、

他の子供の意志によって、あちこちに駆けねばならない、

真中に二人で組になっているときは、

互いに守備しなければならず、

一本の縄を互いにしっかりと持ち、

ひとりはその相手をしっかりと守ってやる。

自由に走り回る子供たちは、

彼らを殴り、ひっぱり、困らせる。

真中に坐る子供が大抵、

もっとも大きな怒りを堪えねばならない。

怠け者が見張り役になると、

その子供はどんなに敵しく扱われることが、

走り回る戦闘者が捕えられると、

彼はかつて苦しんだ人間の坐った場所に

坐るのだ。^{注4}」

74 地下室の扉を登る Op het Kelderluik loopen

(図2)

一人の少年が市庁舎風な建物の地下室に通じる斜面上の扉を、全速力で登っている。大抵は扉の上の壁にナイフまたは棒の先に帽子が掛けられ、それを足で蹴落すのを目撃して登るのであるが、この画面ではそうした帽

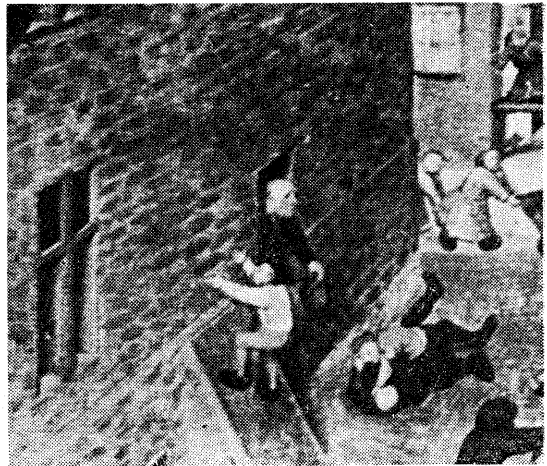


図2 ブリュール「地下室の扉を登る」
('子供の遊戯'の部分⑩)

子はみられない。もしこうした地下室の扉がないとき、子供たちは壁に板を斜めに立てかけ、後ろからしっかりと押えてもらって、「壁登り」をする。

「壁登り」というのは、十七、十八世紀の古い曲馬学校ではよく練習させられたらしい。実際、一七一九年にニールンベルクとフランクフルトから発行された『簡

潔かつ明確な曲馬解説』の図の中に、ある男がレンガの壁の前に立ち、右手で壁近くに斜めにナイフをもち、そこに大きな羽毛飾りの帽子をひっかけ、他方、壁登りが壁にむかって飛び上がり、左足のつまさきでナイフの先の帽子を蹴落す、という動作が画かれている。^{註5}そこには、「どんな風にしても壁に対して登り、棒にかけられた帽子を足で投げ飛ばすか」という風に記されている。

75 掴み合ひ Vechten (図2)

建物の前で、二人の少年が激しく掴み合ひをしている。強い方がすでに相手を地面に倒し、その首を押えている。こうして馬乗りになって戦う二人のポーズは、すでにブリューゲルの七つの罪源のひとつ「激怒」にみられる(図3)。ただしここではナイフを相手の首にあて、殺害せんとするきわめて危険な状態である。それに対して、この「子供の遊戯」では単なる喧嘩なのである。すぐ前の入口から、ひとりの婦人が水の入ったバケツを二人にかけ、やめさせようとしているが、いかにも日常

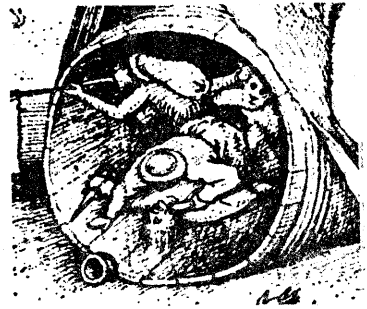


図3 ブリューゲル「激怒」(部分)、
下絵素描 1559年

的でユーモラスだ。

ところで子供がこうした掴み合ひをしている情景をみて、「喧嘩」Vechten なのかレスリングごっこをしているのか即断できない。最初は遊びで戦い合っていたのが、いつの間にか喧嘩になることもある。一般に彼らの側に骨、輪、独楽などの道具がある場合、喧嘩が始まったと解釈されよう。喧嘩の例としてみられるのが、十七世紀のフランドル系でリヨン生れのジャック・ステラの『子供の遊戯と楽しみ』(図4、一六五七年)で、そこで

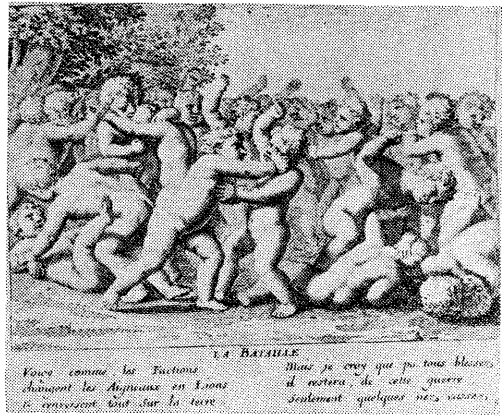


図4 クローディン・ブゾネ・ステラ「喧嘩」
 (ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』
 1657年より)

は二十名以上の子供たちが互いに相手を殴ったり、頭を押えたり、地面に倒したりしている。しかしいづれも半ば、遊びの要素も加わり、重大さを感じさせない。下の余白にもこう謳われている。

「ここで、どんな風に仲間たちが、羊をライオンに豹変させ、地面にみな倒してしまいかをみよ。



図5 「喧嘩」(「子供版画」の部分)
 ヴェレンス=デルヴェンネ社、
 トゥルンハウト (1834-1844)

しかし怪我したといっても、この喧嘩はたんに鼻をつける程度で終るだろ^{注6}う。」

十九世紀前半に発行された「子供版画」(図5)では、帽子も地面に落ち、互いに髪を掴み合って、激しい取り組み合いの最中が画かれている。下の余白にはオランダ語で、「少年たちをよくごらんさい、喧嘩はもっとも悪い遊びだ」、さらにその下にはフランス語で「闘った

り、喧嘩したりは、軽蔑すべき遊びだ」とある。なおベ
ルギー人のグロータース神父が筆者に語ってくれたとこ
ろによると、神父が子供の頃、兄弟同志で掴み合いの喧
嘩をしていると両親から、*jeux de mains, jeux de vi-*
lains (mains と villains の語呂合わせに注意)、すなわ
ち、「手を使う遊びは、悪党の遊び」と云って叱責され
たという。ゆえに版画の銘文には「戒め」の意味がある
ようだ。

子供の喧嘩の主題は十七世紀のオランダのタイル画や
版画にもよく描写されている。九柱戯の競技をしている
中に、取っ組み合いの喧嘩となったもの(図6)、互いの
首を掴んで激しく戦い合うもの(図7)などの作例があ
る。後者の木版画では犬も驚いて歯をむいて吠え立てて
いる情景も加わり、さらに余白には「これらの者たちは
互いの髪を引っ張り合う」と記されている。

しかしこうした取っ組み合いではなく、古くから村の
縁日やその他の機会に村の若者同志が力だめしのレスリ
ングをして興じることももちろんあったであろう。そこ

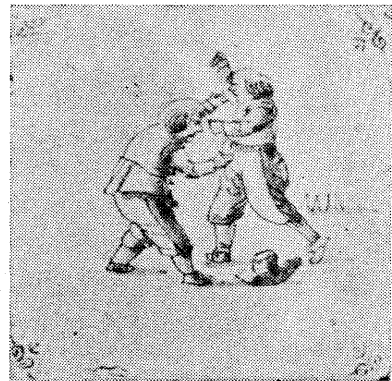


図6 「指骨遊びの喧嘩」
オランダのタイル画 17世紀中期



図7 「喧嘩」(「子供版画」の部分)
ラテルパント=パウアー、アム
ステルダム (1760—1820)

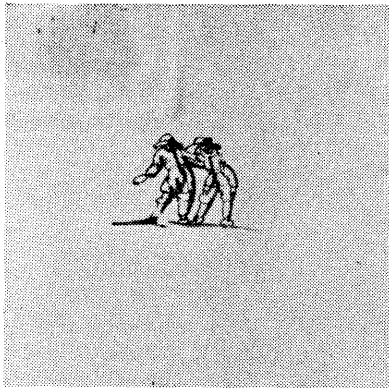


図8 「喧嘩」 オランダのタイル画
17世紀後半



図9 「喧嘩」(部分) 木版画
18世紀

でこのブリューゲルの画面でも、本気の喧嘩ではなく、大人たちのレスリングごっこを模倣しているのだ、という可能性も全くないわけではない。実際ルターは一五二四年、ドイツの諸都市の市参事会員にむかってこう請願している。

「私の考えでは、少年たちを一日に一、二時間こうした学校に行かせるべきだ……そうでなければ彼らは仲間とその十倍もの時間、玉打ち、ボール投げ遊びをし、走り、掴み合いをしてしま^{せう}う。」つまりルターはここに「掴

み合いごっこ」を挙げているが、いかに子供たちの愛好了した遊びであったかがうかがわれる。

こうした遊戯としての「掴み合い」の例として、十七世紀後半、子供の遊戯を描くオランダのタイル画がある(図8)。そしてそれに基づいたヴァリエーションと思われる十八世紀の「喧嘩好き」と題されたオランダの版画(図9)では、三人の少年たちが向き合っているが、真中の男の子が左右の仲間から攻撃をうけると、身構えている。いずれも相手が地面に倒れるまで戦ったらしい。

76 壁に玉をぶつける

Muurke-botsen (図10)

まずひとりが壁にむかってナツツ、マロニエの実、小石、コイン、鉛の一片、ビー玉などを投げる。つぎに相手も同じ行為をしながら、その玉を相手のそれに当てなければならない。も



図10 ブリュエーゲル「壁に玉をぶつける」
 (『子供の遊戯』の部分⑥)

し当たれば二個得られる。当たらない場合でも、二つの玉の距離が手の平以内なら、一個獲得できる。この絵でもちゅうど地面にひざまづいた少年が手の平で二つの玉の距離を測っているところである。

しかしオランダではしばしば硬貨を使つての遊びは禁じられていた。例えば、一五六七年のハーグの法律では「壁にベニング(訳注、小銭)を投げる」行為に対して禁止令が出された。^{注8} ラブレールもこの遊びを「命中ごっこ」
 Au franc du quarreau と呼んでいる。ステラにも「コ

インを投げる」と題された詩(図11)がある。

「この元気な
 子供はコイ
 ンカリヤー
 ル(訳注、
 昔の銅貨)
 を

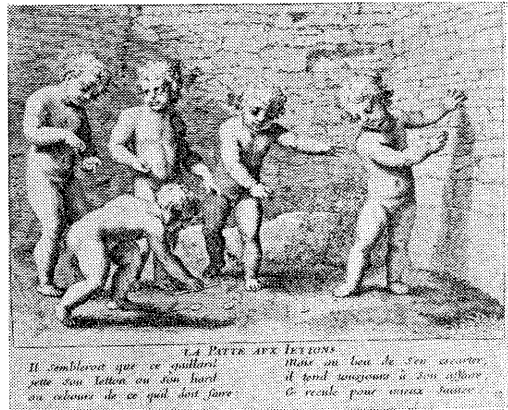


図11 クローディン・ブズネ・ステラ「コインを投げる」(ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より)

ふつうのやり方とは逆に投げているようだ。彼はそれから遠ざかることなく、つねに自分のことによく注意し、よりよく跳ぶために数歩後退する。^{注9}

なおこの詩の最後の三行には教訓的な意味があることに注目しよう。

壁に投げず、地面の上で玉を転がす石のビー玉は、紀

元前三千年、すでにエジプトのナガダで発見されている。しかし近世になってから Knikker と呼ばれるビー玉は、一般に陶土を焼いたものがガラスまたは大理石で作られている。その場合、子供を喜ばせるため、釉薬をかけたがり、多彩に着色することもある。ヤン・プロイスのつぎの分類によると、オランダの子供たちは春、この遊戯に興じ、種々のヴァリエーションを考えた。^{注10}

1、バホラ Bagorra

ユダヤ人の遊戯に起源をもつ過越祭の遊戯。オランダのフリースラントではマホリ magorie、

ゾアン地方ではホルン gorren と呼ばれた。子供の立っている位置から一定の距離に横一列に並べられたビー玉をめがけて転がすもの。一番



図12 「ビー玉遊び」(「九つの穴」)
オランダのタイル画 17世紀中期



図13 「ビー玉遊び」(「ナッツに当てる」) 木版画 18世紀

左のビー玉をバホラと呼び、もしそれに当たれば、全部がその子供のものになる。

2、九つの穴またはクローミ転がし Negenkullien, koemj-rolten (図12)

前回の72と同じく、三個ずつ三列、九つの穴があければ、その中にビー玉を入れる遊び。他より大きい真中の穴がクローミ、角の四個がステケル、他の四個がトレッケルと呼ばれる。まず玉がクローミに入ればその中の玉も入る。ステケルに入れば、自分の玉をクローミに入れ

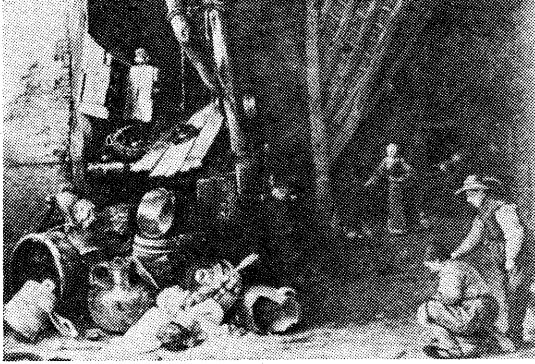


図14 ヘルマン・サフトレーヴェン三世「納屋
の内のビー玉遊び」油彩 17世紀



図15 W. ハミルトン「輪の中にビー玉を入
れる」銅版画 1790年頃（フランチェス
コ・パルトロツィ刻）

一定の距離から投げて輪の中
の玉に当り、かつ自分の玉が
輪の内側にとどまればそれを
もらえる。それからもう一度
試み、自分の玉が輪の中に留
らなかつたらアウツとなる。
この遊びについて、次のよう
な詩の添えられた木版画があ
る。

「僕が一番にビー玉をする
のだ（クートちゃんがい

ねばならない。トレッケルに入ればクローミから玉をとり
出すことができる。

3、ナッツに当てる *Notenschieten* (図13)

一列に縦に並べ、一番遠い玉に当たれば、全部がその
子供のものになる。もし他の玉にあたり、列がくずれた
ら、それをもとに戻し、自分のもっている一定の数の玉

を列の横に並べなければならぬ。十七世紀のサフトレ
ーヴェンの絵(図14)では、家財道具の散在する納屋
で、二人の少年がビー玉を転がして遊んでいる情景が画
かれていた。

4、輪の中にビー玉を入れる *Potje knikkeren; schieten*

Et de O (図15)

丸く描かれた輪の中に、一、二個のビー玉を入れる。



図16 「帽子にビー玉を入れよ」
木版画 18世紀



図17 「帽子を回す」 オランダの
タイル画 18世紀前半

二人の少年の近くに、年少の子供が棒の先に帽子をのせて回している(図10)。ド・マイヤーはこの遊びをつぎの76の「行列ごっこ

う)

そして輪の中からひとつをはじき出す。

まだだめだ(クラーヌがいう) 僕がそれをすべきなのだ。

いや多分僕がする(小さなクーンがいう)「

5、線に当てる Schreefje schieten

子供の立っている場所から、約三米離れて引かれた線にむかって、ビー玉を転がす。なお両側も線で囲まれているのがこの遊戯の特色である。ビー玉が線上を越えた

り、到達しなければアウトである。もし玉がその線にもっとも接近して転がった場合、すべての玉がその子供のものになる。もし硬貨で遊ぶときは、たとえお金を得ることができても表(頭部)か裏(文字)を当てることのできなければ、すべての手にしたお金を放棄しなければならない。^告

6、投げ入れる Stuiiken (図16)

初めにひとりの子供がある一定の数のビー玉を手の中に入れ、穴または帽子の中に投げ入れる。そして中に入った数の玉だけもらえらる。もしもらえなければ相手のものになる。



Hy zegt wat 't is myn beste Hoed,
En schop je die zoo met de Voet.

図18 「帽子遊び」(「子供版画」の部分) ジャック・ヴァン・エグモント, アムステルダム (1761—1814)



Daar gaathy, wees maar niet bedugt;
Ik schop myn hoed niet in de leg.

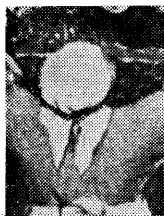
図19 「帽子遊び」(子供版画)の部分) 18世紀

供たちは *muts* とよばれ、外形は大人用と同じく、サイズの小さい帽子をもらう。その頃になると、少年たちは帽子を蹴り上げたり、空中に飛ばしたりして遊んだらしい。ブリュッゲルの「子供の遊戯」でもほとんどの子供たちがそれぞれ年令に応じた被り物や帽子

「こ」と関連させて考えている^{註12}。しかし筆者の考えでは、この男の子は独り遊びをしているのであり、むしろ独立に数えた方がよいと思う。十八世紀のオランダのスタイル画(図17)にも、手や棒で自分の帽子を回す独り遊びや、ひとりは帽子を頭の上に、他は足で回したりする二人遊びの情景がみられる。また銘文のある十八、九世紀の木版画をみると、「何が私の一番いゝ帽子かと彼は云

う。そしたら君は足で帽子を蹴り上げる」(図18)とか、「ほら彼はあっちにいよいよ。だが恐れるな。私は帽子を空中に蹴りあげたりしない」(図19)などと書かれている。興味深いことは、ネーデルラントでは古くからまだ歩けない乳幼児がようやく子供椅子に坐れるようになるのと、落下防止用帽子 *valhoed*(普通保護帽ともよばれる)である厚手の帽子を被せられた。その後、成長すると子

図20 子供のいろいろな帽子（ブリューゲル『子供の遊戯』より）



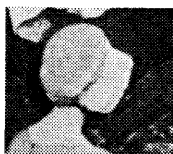
⑫ ガラガラ遊び



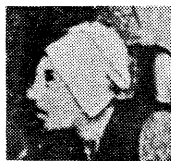
⑩ いくつもってる



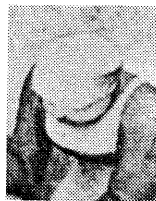
⑭ 花嫁行列ごっこ



① お手玉遊び



① お手玉遊び



⑳ お店屋さんごっこ



⑮ 棒馬ごっこ



⑳ 兎跳び



㉑ ガラガラ遊び



⑨ ナッツ穴あけ遊び



㉒ 輪回し



⑤ 風車で槍合戦

をつけているのが特色だ(図20)。まず三、四歳の女の子は大抵、白い頭巾で髪の手を覆い、後ろで結んでいる。また十歳前後の男の子は縁つぎの丸帽とか、スキー帽のように首の下で止めるもの、女の子の方は看護婦帽のそれを思わせる白い帽子、赤白二色のオシヤル帽、コッホの絵にもみられる大人の白い頭巾、被り物と帽子を二重につけているものなどを被っていて、帽子の種類を数えてみるだけでも楽しい。

注1 Victor de Meyere, *De Kinderspelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 10.

注2 F. Hartmann en E. Lens, *Héél Joh!* Amsterdam 1976, pp. 82-83.

注3 Hadrianus Junius, *Nomenclator oecolinguis, omnium rerum propria nomina continens*, ed. German Germberg, 1619, p. 253.

注4 *Kinderverweck ofte Sinne beelden van de spelen der kinderen*, J.A. Calom, Amsterdam 1626.

注5 Alexander Doyle, "Chur-Maynthischer Hof und Universitäts-Fecht- und Voltagier-Meister", *Kurzzen und deutlichen Auslegung der Voltagier-Kunst*, Nürnberg und Frankfurt 1719, Abb. 64.

注6 Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 50.

注7 J. Bolle, "Zeugnisse zur Geschichte unserer Kinderspiele", *Zd.V.j.V.*, Bd. XIX, 1909, S. 385.

注8 J.W.P. Drost, *Het Nederlandisch kinderspel vóór de 17e eeuw*, Nijhoff, 1914, p. 110.

注9 Stella, *op. cit.*, No. 19.

注10 Jan Plus, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, pp. 157-164. フライヌは十七世紀の「子供の遊戯」のタイトル画に詳しく、本稿も図版その他で多くを参照した。

注11 「頭部」というのは、コインの表側に多く皇帝や為政者の肖像が彫られているため、他方、「文字」という意味は裏側に刻まれている銘文のことであろう。

注12 De Meyere, *op. cit.*, p. 10.

(明治大学)